置いた。

本妻はますます妬んで、ある時、花畑で花見の上覧があった折、美男の彼は殿の御附役なので、殿のお供をして花畑に行った。

桜姫はひそかに、手紙の如きものをこの男に渡して、これを阿梅に渡せと申付けたので、何心なく取り次いで、花の木蔭で阿梅に渡した。桜姫の計略とは知らず、受け取って開いて見たところを、殿の目にとまった。殿は阿梅を呼び寄せ、事の次第も問わず、文を取り上げて見たところ、密通数度に及び、阿梅の腹の子も彼の男の種ならば、男子が生まれれば長沼中納言の家をともに握り、主君夫婦を毒殺しようという書状なので、時貞は大変怒り、阿梅を調べもせずに、花畑の桜の枝にくゝりあげ、つるし切にして殺してしまった。

阿梅塚

その泣呼ぶ声は晴渡る春の日も曇り、咲きほこる花もしぼみ、散るかと思われた。供の者一同、片唾をのんで、肌に汗して折角の興もさめてしまった。

男も直ちに斬處させてしまった。殿と桜姫は、やがて城に帰ったが、それからは阿梅の怨霊が花畑の桜の木の間より出て、城の方をにらみ、殺された時、叫んだ声とともに陰火が燃え、城の方に昇って行くのである。